

阿部 公彦

このところ「罵詈雑言」がよく話題になる。ネットや公の場所で、地位のある人が「あれれ？」という口を口にする。もちろんことばは人間の最も有効な武器だから、批判も攻撃も応酬もよく人間的な営みではある。ただ、「ほげ」「かす」「はげ」「びん」といった

あまりに貧しい悪意の表出には驚く。たとえば『ガリバー旅行記』をはじめとする18世紀英国の文学は風刺性と毒に満ちていたが、これは国王が殺害されるに至った直前の動乱の時代に対する反省と反動から生まれた文化でもあった。悪意のことは洗練は、ときに物理的な暴力を凌駕し抑制しよう。

最近の詩の世界はとかくこざれいなものになりがちだ。そんな中で「悪」や「醜」や「貧」に徹底的に浸った作品に衝撃をうけた。古賀忠昭『古賀廃品回収所』（書肆 子午線）。廃品回収所が舞台となる私小説めいた語りだが、貧乏臭にまみれ、罵倒や下ネタをふんだんに含んだ詩行に妙な朗らかさが漂う。一見した汚さと

は裏腹に、生と死の境界線ではじけることばはどこか爽快である。詩人は2008年に逝去とのこと。

石田瑞穂『耳の笹舟』（思潮社）と野村喜和夫『久美泥日誌』（書肆山田）は対照的な詩集。前者は行替えの余韻をたっぷり生かし、世界に聞き耳をたてながらことばを拾うように語る。様々な音が溢れるのになぜか静謐。突発性難聴という背景が明かされるに及んで納得した。後者は作中の生物学の老研究者が、「鞭毛」などの原型的なイメージに谷崎的なねつとりしたマゾヒズムをからめ、若い女性への偏執的な恋を変奏曲風に語る。「周縁の蛇よ、内奥の犀よ、うらてのヒドロゾアよ、間隙の猿よ、高所の蟻よ。それぞれの持ち場で、私を護れ、脅かせ」といった狂おしさと諧謔とのブレンドにも注目したい。

最後に今一つ強烈な詩集を。『ウイグルの詩人 アフメットジャン・オスマン選詩集』（ムカイダイス十合真訳 左右社）。骨太のごつごつしたことばで、大地と天と風の織りなす壮大な世界に、幻のような神話的

愛を現出させる。不意にまぎれこむ甘いイメージの、極上の曖昧さがいい。見事な訳文だ。

（東京大准教授）

一見した汚さ、裏腹に爽快さ